

# 「戦後」沖縄における「標準語」指導

Education of “standard Japanese” in “postwar” Okinawa

長谷川 精 一

キーワード 沖縄、標準語、方言、沖縄教職員会

## はじめに

本稿では、凄惨な地上戦を生き抜いた後に米国による長期にわたる直接的な軍事占領を被ることになった「戦後」沖縄において、教員たちはいかなる社会観、教育観に基づいて、教育実践を通じて、自らいかなる主体形成を行なおうとし、生徒たちにいかなる主体形成を促そうとしていったのかという点に関して、「標準語」指導に焦点を当てて、敗戦から 1960 年代までの時期について、教員たち自身の発言に着目しつつ考察したい<sup>1)</sup>。

### 1. 戦後初期：

#### 言語政策についての流動的な状況

米軍の沖縄占領政策は、本土のような公職追放を行わず、戦前の指導者を利用しようと試みるものであり、そこでは、非日本化、親米協調、沖縄の独自性が強調された。戦後初期においては、教育言語を沖縄語（沖縄方言）にする可能性があった。沖縄師範学校女子部教授として「ひめゆり学徒隊」を率いた仲宗根政善は、戦後、民政府文教部編集課長となるが、米国軍

政府の諮問機関で沖縄戦による沖縄県庁解体後沖縄本島における最初の行政機構であった沖縄諮詢会に対して米軍から、「方言」で教科書を書いたらどうかという諮詢があったと述べている<sup>2)</sup>。

また、東京で沖縄人連盟の結成に加わった比嘉春潮は、GHQ から連盟に対して沖縄で「沖縄語」での教育を行うべきではないかとの諮詢があったとする<sup>3)</sup>。さらに、米国海軍軍政府教育部長であり、戦後初期の沖縄の教育に深く関与したウィリアード・A・ハンナは、「沖縄の教育の将来がどうなるのかだれも知らなかったし、学校のことを英語にするか、日本語にするかといったことも決められない。…彼らは沖縄人でもあるし、日本人でもある。…私としてはどうしていいのかわからなかった」と記している<sup>4)</sup>。沖縄諮詢会社会事業部長、沖縄民主同盟党首となった仲宗根源和は「方言」で教科書を書いたらどうかとの意見をもっていた<sup>5)</sup>。

これに対して、教職から追放されず戦後も指導的立場にあった沖縄の指導者たちの意見はいかなるものであったのか。沖縄諮詢会教育部長であった山城篤男は「標準語」による教育を支持しており<sup>6)</sup>、仲宗根政善は「終戦直後方言をもつて沖縄の常用語とし度いといふ意見が一部

の人の中にあり標準語に対する考へ方が幾分、動揺してゐたことは事実である」<sup>7)</sup>と記している。

戦前は沖縄師範学校女子部附属小学校教員であり、戦後は琉球政府文教部長、神原小学校長となった中山興真は、「方言というものはそんなにくさすものではない、方言をいやしむという風に評価し位置づけた過去に非常に恥ずかしい思いをしたことがある。…戦争中、私は山小屋にお世話になって、そのままアメリカ軍にひっぱっておろされたわけですが、そこには、避難民が沖縄県中のあらゆる市町村から集まっていたんですが、その時はみんな方言です。「解放」ということです」<sup>8)</sup>、「戦争中、日本軍の住民に対する横暴な態度・行為は、日本への不信と反発になり、その反動として英語教育の必要性や沖縄語による言語教育の確立を主張する声があり、教育関係者は混迷と苦悩の日々であった…方言の生活地域と環境にあつては純正な方言の上に立たなければ純正な標準語生活も順調に成長しないと考えられる」<sup>9)</sup>と述べている。

そのような中、沖縄諮詢会によって「教育言語を標準語とする」という方針が決定された。通達を受けた瀬嵩地区の様子は次のようだった。

戦いに敗れ、米軍に占領され米軍の指揮と監督とその保護を受けていると、必勝の信念の強固であつた者程迷いと混乱の精神状態になる。過去の自分の進んで来た道への否定となつたりもする。収容生活第一歩から英語の世界に入り、その必要を日々に体験させられていると国語に対する不信論、動揺性も当時の混乱時では確かにあつた。学校教育がいかなる方向に進むか、実のところ問題にする向きの声も耳にしたことであつた。その折、石川市に文教のこと

を心配しておられた山城篤男先生、安里延先生から、言語教育はどこまでも標準語でいけ、迷う勿れとの通達が来たのである。学務課職員、学校職員が晴天を迎えた喜びと安定感に打たれた事実は忘れることが出来ない<sup>10)</sup>。

## 2. 戦後の標準語（共通語）励行： 児童・生徒の回想から （終戦～1950年代の状況）

それでは、敗戦から1950年代の時期にかけて、教育現場では標準語に関してどのようなことが行われていたのか。名護小学校の1949年度の卒業生は述べている。「五年生になった時、標準語励行運動が努力目標になり、『方言札』が回されるようになった。最後にこの札を持っている者が罰せられる仕組みになっていた」<sup>11)</sup>。また、沖縄市出身の幸喜良秀は、「戦後最初の小学校一年生は僕たちから始まるんだけど、終戦直後はわりと方言は自由でしたね。ところが、四、五年生になって、共通語励行ということが頻繁に言われるようになった。一九五〇年前後でしょうか、熱心に共通語励行をさせられました」<sup>12)</sup>と記している。

1951年4月には第2回全島校長会で、年度目標として「標準語の励行を徹底させる」<sup>13)</sup>ことが掲げられ、1951年春から「言語教育」の「実験学校」に指定されていた田場小学校の山城宗雄校長は「標準語を通して心に日の丸を揚げよう」と語っていた<sup>14)</sup>。1949年に玉城村に生まれた高良勉は、1952年頃、教員たちは「復帰について新聞をよく読んで聞かせ」と同時に、「復帰せんといかん、日本にどうせいくんだから、日本語を使えんといかん」、「日本語を使えないで帰ったら恥だ」と生徒たちを絶

えず叱咤していたとし、以下のように回想する。

小学校一年生になってはじめて日本語に出会い…日本語を使うのは学校の授業だけで、休み時間やいえに帰ると琉球語が中心であった。…高校時代まで、基本の生活はうちなーぐちだったように思います。…小学校三、四年生の頃から、「標準語励行運動」が盛んになり、毎週のように週訓は「共通語を使いましょう」になっていきました。そして校内に「方言札」が出廻るようになりました。…放課後まで方言札をもたされ、「週訓を守れなかった者」として担任から注意されます。それがたび重なり、放課後のこされて竹ぼうきの柄がバラバラになるまでおしりを叩かれることもありました。…しかも、その方言札が部落や地域にまで出廻るようになりました。おかげで、家に帰っても安心して琉球語が使えません。みんなだんだん無口になっていきました<sup>15)</sup>。

また、猿田美穂子の行った「方言札」に関する聞き取り調査では、方言札は、A4の厚紙に「私は方言を使いました」と書かれているもので、鬼ごっこのようなゲーム感覚で回していた、児童と同様に学校では標準語で話し、学校外では方言を話す教師もいた（1950年代後半、城南小学校）、方言札以外の罰則として、竹刀で手を叩かれたり、教師の靴を川に洗いにいったりした、方言札を恐れたり憎んだりして苦痛に感じていた（1950年代前半、城北小学校）<sup>16)</sup>と回顧されている。なお、1960年代初めに沖縄を訪れた東京の大学教授は、高校の廊下に「共通語から祖国復帰」、「恥じよ方言、誇れ共通語」という標語が貼ってあった、と語っていた<sup>17)</sup>。

### 3. 標準語指導の実際：

#### 沖縄教職員会・教育研究集会の記録から

沖縄教職員会は1955年から教育研究中央集会を開始したが、その第1回集会の第五分科会では「児童生徒の学力を向上させるために、言語指導をどのようにしたらよいか」という主題で討議され、そこでは、児童・生徒の学力向上を掛け声として、地域社会との連携を重視して、標準語普及の徹底を図り、標準語は子どもを社会化・規律化するためのひとつの指標として機能していることが報告されていた。

県内の各地区からの報告では、言語生活の実態調査を行った結果とそれに対する対策が論じられているが、例えば、宮古地区からの報告は、「我々は如何なる特殊事情下にあるが如何に貧弱な実態にあるが決して之を悲観の材料にしてはならない。我々の教育は時の煉瓦の積み重ねではなく生きた児童生徒の其の場其の場の生命に触れることによつてのみすべてが可能である。教育課程が如何に完璧に出来ようと、そうした知的な工作は教師の熱意と同情を根幹としてなされねばならない」と述べ、「正しい言語指導に対する対策（言語の矯正を如何にするか）」として、以下の各点を挙げている。

- イ 不適用語と思われる言葉違いを誤と正とに区別してプリントにし各子供と家庭に配布し是正に努める
- ロ 国語の時間を利用して話し言葉の実地指導を行う
- ハ レコードによるアクセントの是正
- ニ 映画のことは鑑賞批判力の養成
- ホ ラジオによるアクセント、抑揚の是正
- ヘ 日本からの教師と子供らの座談会を行う

ト 日本との交換学生による言葉の是正

チ 教師の日本派遣（標準語研究教員）

リ 標準語使用運動の展開

また「二 国語教科書と言語生活指導の面からの対策」として、次のように記している。

イ 毎朝自習時間の写本

ロ 教材の劇化

ハ 朗読を習慣づける

ニ 読みの基礎的練習

ホ 平仮名がよめてもまとまった文として読みとる能力が低いのは平常の思い言葉が方言なるため思惟作用もすべて標準語でまとまりをつける習性がついていないからで分団組織の言語制裁も（其の場教育は正）必要かと思われる

ヘ 家庭学習の強化

さらに、「三 読み書き話し言葉中沖縄の特殊事情からくる欠陥に対する対策」として、以下のように指摘している。

- 1 家族会議を毎週一回開いて子供を中心に自由に語り合い意見の出し方を指導する
- 2 子供の教科書に親がしたしむ様 PTA を通して協力を重ねる
- 3 手紙が来たら家族全体に読んで聞かせるようにし子供に出来るだけ手紙を書く習慣をつける
- 4 日記の指導
- 5 冗費を節約して新聞雑誌の購読に努める<sup>18)</sup>。

続いて、その後の教育研究集会の記録の中から、国語分科会と国民教育分科会についてみておきたい。1957 年の第 3 回教育研究大会の国語分科会では、「正しいことばの指導はどのようにしたらよいか」というテーマで、「共通語指導の根本態度」として、

1. 現実を離れることなくよい模範を示して

指導していく。

2. 根気よく長期にわたって指導する。

3. 次第に経験の裏づけのある正しい言葉を増していく

4. 個人指導を強化する。（個人差の考慮）

の 4 点をあげる。胡座地区の嘉手納小学校一年担任である徳元千恵子は「無口な児童を如何にして発言させたか」に関する事例として以下のように述べている。

九月十三日教科書代二十八円持って来る様伝達すると、翌日新一は百円札を持ってきて私の机の上におき一言も言わず自席に帰った。私は帰る時におつりを上げ様とっていました、忘れて職員室に行きました。新一は帰らずに私の後について来て職員室の前をうろうろしている。新一の顔を見るとすぐ釣り銭を思い出しましたが知らない振りをして新一さんどうしたの、と聞きますと側によって来て『シンシイ、ケーグワ』と小声で言った。これが入学以来初めての発言である。その時私は胸が一ぱいで何とも言えない気持ちで臉が熱くなりました、「これは学校で方言さえも口をきくことのできない子どもの発言を指導している記録である。我々は話すことの指導は、先ず何でもよいから子供が話すということから、はじめなければならないという話し方の基礎に努力しているということを、これから学ぶのである。我々は共通語の指導を急ぐあまり、子供たちの発言の態度をい縮させてはならない。

その一方では、「共通語を励行する場合、生徒に劣等感を抱かせたりまたは卑屈になったりするのではないかと心配する人もいるが生徒はそうは思っていない」、「むしろ社会に出てから共通語が十分使えないことによって、劣等感が起

ることが予想されるがそれこそ大きな問題である」と主張する意見も掲載されている。

また、嘉手納小学校での家庭、校内、学年別、男女別「共通語使用実態調査」の結果として、「家庭に於ける標準語使用の状況」について、

○標準語使用家庭 5.59%、○方言使用の家庭 64.98%、○混用している家庭 29.43%

「校内外に於ける調査」に関して、

○校内外標準語使用している児童 4.70%

○校内のみ標準語使用している児童 73.60%

○教室外で方言している児童 16.24%

○教室内外で方言を使用している児童 4.82%

○口をきかない児童 0.64%

という数字があげられており、古宇利小学校(名護地区)5・6年(複式)での指導の実例として次のように記されている。

#### 1 学級子供会の問題として取り上げた。

○不正語表をつくること。

不正語を使った人、直した人をホームルームの時間に日直が発表する。

○学級不正語表を作る。

学級委員が一週間毎に日直日誌より整理して発表し皆で正しく直している。

○不正語使用者調べ

自分で直した者について記入させる。皆熱心に素直に直し合っている。家庭でも児童が中心になって直している。

#### 2 ポスター 標語を作らした。

#### 3 クラス会の問題として取り上げる。

○不正語を尋ねる札を作る。

○札を作りその動きによって不正語がどんなに利用されたかを調べる。毎日の反省会で委員がまとめて表を作る。

#### 4 生活日記を通して指導する。

#### 5 継続的に指導する。

不正語表から取り上げて反復練習する。児童の質問に答える。

#### 6 言葉に関する記事をあつめさせて関心を高める。

#### 7 クラス会を委員制にして全体に発表の機会を与えるようにしている。

さらに、稲田小学校の教員、金城ハル子の「生活指導はいうまでもなく、全学科においてたえず関連づけて指導を行いたい。特に学校においてしばしばとりあげられる共通語励行と調子を合わせて指導を考慮したい。方言を育てつ、共通語を育てるという気持ちで望みたい」という意見が掲載されている<sup>19)</sup>。

1958年の第4回教育研究大会国語分科会においては、「津覇小学校の報告」として、「実際の指導」に関して、「教室内における指導」については、

①朝のおはなし=1・2年

②口まねによる指導

③頭作文の指導

④実演による指導

⑤不正発音、不正語表の活用指導

⑥グループ編制による共通語の相互指導

があげられ、「教室外の指導」については、「ことばは生活である。教室内で教科指導の際、力をつくしてことばの指導純化を図っても教室外における生活(遊び、作業)に方言ばかり使用しては其の効果はあがらない。知識として持っている抽象的な語いも具体的な生活において自由に駆使して始めて自分の血肉となり、有用な道具になり得るのである」と主張されている。また、「方言札」の使用に関しては「方言札は大衆の前で辱めて方言使用を禁止し共通語使用を奨励しようとするもので軽率にそれを使

用したらたとい少数であっても児童の人格をきずつけて反抗感、劣等感をもたらしたり、緘口的な児に作ったり陰日向のある児を育成したりする結果になる。教育的なよい方法ではない」、「教師はちょっとの不正語不純語も敏感に聞きつける愛の耳をもって聞きのがさないであたたかい慈愛のこもった指導と讃辞をあたえることが必要である」、「一人一人の児童に目をかけて立派に育てあげて、将来に充分なる備をつけてやりたい」<sup>20)</sup>と述べられている。

また、国民教育部会は1962年度から設定されたものであり、米軍支配の長期化にともなって帰属意識の希薄な子どもが目立つようになったことに対する危機感を感じた教師たちが国民意識の高揚を求めて設置したものであったが、1966年の第12次教育研究集会国民教育分科会では、糸満地区から「集団就職者及び県民性への批判について、どうとらえどう指導していくか」というテーマで報告があり、「国民意識調査」(1965. 12. 13実施)として、地区のある中学校で取ったアンケートにおける、以下のよう

- (1)「私は沖縄の方言ばかり使用するのがよいと思います」

1年：9名、2年：19名、3年：9名、合計37名

- (2)「私は日本国民全体のことばである共通語を使用するように努力したいと思います」

1年：381名、2年：378名、3年：374名、合計1133名

- (3)「ことばは方言でも共通語でも英語でも自分のかつてにすきなものを使用すればよいと思います」

1年：60名、2年：99名、3年：6名、合計220名

そして、(この質問は)「ことばと国民意識についての傾向をみることにしたのであるが…ことばを国や国家の同一民族的なものの立場から考えていない生徒が小問(1)で37名、(3)で220名もいることは国民意識の面からも勿論であるが平素の生活の面からも考えさせられることである」とする。そして、「国民意識を高めるための実践例」として国語科の学習指導に関して、「国語科の学習指導は国語を正しく理解させ、日常生活に活用できるようにするとともに、国語の歴史を理解することによって、更に国語を発展させるという分野を担当しているのであるから、国民教育に大きく寄与することは申すまでもない。特に小学校の低学年の国語学習指導においては国民として生活していく上に最も基本的な「国語」を正しく、美しく日常生活に活用できるよう十分な配慮が必要である」と主張し、中2国語の「国語科学習指導と国民意識を高める指導との関連」については、

(単元)「読める文字のよろこび」

(内容)「イスラエルは国策としてヘブライ語を使うことにしている。それは世界のあらゆる地方に住んでいるイスラエル人がどんどん祖国にもどってくる。一つことばを使うことによって心を結びあう」。

(留意点)「国語が国民の心と心を結びつける大切な役目をはたすことを強調する」。

という事例をあげている。

また、名護地区の報告では、本土との一体感を深めるための方法として、「教科書、日の丸、言語、風俗、習慣、日常生活等の実質的一体化(集団就職における言葉や礼儀作法等)をとりあげて指導する」とし、「言語、躰、生活文化その他本土と違う点がある」集団就職者への対

応として、「言語に関しては過去に於ける沖縄人の本土で失敗した事例、経験等を絶えず話し、その必要性を強調し、併行して、共通語が充分話せるよう校内では督励し、躰の面では、あいさつ、お礼の仕方等が欠けているのでそのつと指導し、特に進路指導、道徳の時間をはじめ特活を通してこれらの問題を漸次向上の方向へと努力している」<sup>21)</sup>ことが語られている。

## お わ り に

以上、戦後初期から1960年代までの時期における標準語指導についてみてきた。敗戦直後には、教育言語を「方言」にするか、「標準語」にするかに関して事態は流動的であったが、沖縄諮詢会の通達以降、戦前からの教員たちを担い手として、教育現場では、戦前の行き過ぎた標準語奨励、方言撲滅への反省も含みつつも、標準語（共通語）使用を徹底させるための指導がなされた。

そして、教職員会の教育研究集会においては、第1回集会第5分科会で、児童生徒の学力と言語指導の関係について論じられて以降、その後の集会においても、国語教育分科会、国民教育分科会では標準語指導について報告・検討がなされた。国民教育分科会は当初、戦前との思想的連続性をもち、日本という国民共同体を疑わない旧世代（校長、教頭層）の価値観を前提とする議論が前面にでていたが、青年層の参加はふるわなかった。1960年代半ばになって、国民教育分科会では旧世代と新世代とが対立し、青年教員による議論の基調の再編がなされる。「『国家』の価値を知らしめ、国民としての心情を『日の丸』や『君が代』を通して育てなければならぬ」<sup>22)</sup>といった主張がなされる一方で、「国民教育班に対する参加人数の構成メ

ンバーに青年が入っていないがどうか。青年教師の意見はどうか。答え＝国民教育をとる前に日々実践のできることからというわけで人数が少ないのでわかい人が参加していない」<sup>23)</sup>、「特に本コザ地区においてはこの分科に参加した現場教師は一人もなく、昨年までの成果を意識的に実践してきた教師は皆無である」、国民教育研究の企画運営に当たった国民教育同好会の「構成員のほとんどは各学校の教頭」<sup>24)</sup>という記録が残っている。

さらに、第15次教育研究集会国民教育分科会において那覇南部支部は「第二次大戦における教育者の戦争責任を明らかにし、戦後の教育者の戦争に対する心構えと戦争についての教育はどうであるかを討論し、これからどのように反戦平和の教育を行うか」という議題を掲げ、第16次教育研究集会国民教育分科会において、八重山支部からは以下のような意見が出されている。

（復帰が近づき）「『日の丸』問題も、再検討の時期に来ていると考える。戦後24年沖縄における『日の丸』は本土のそれとはおのずと別の意味を持って掲げられて来た。つまり、植民地主義への抵抗、民族統一のシンボルとしてである。ところが、権力体制は沖縄、広島にみるとおり、戦争の爪跡も未だにいえぬ今日、又しても国家主義、軍国主義のシンボルとして『日の丸』『君が代』を押しつけてきている（第16次教育研究集会国民教育分科会八重山支部）<sup>25)</sup>

ところが、「日の丸」、「君が代」とは異なり、標準語指導の必要性は新世代の教員たちも否定できなかった。それは、「心あるものが日本憲法で守られない国民がどうして真の日本国民だといいきることができようか」という問いを覚

えるのはもっともなことである。…それでもわれわれはあくまでも日本の一国民に違いない。この考えのもとにわれわれ大人がこの世代で正しい日本人としての国民教育を施さないとまた次の世代でもわれわれと同じ疑問と悩みを続けなくてはならない。尚、また若し民族の悲願である施政権が返還された暁、県民の真の日本人としての国民意識、国民文化のズレ等に大きな差があるとしたら本土同胞の疑惑との目と差別扱いは避けられないことになるであろう」<sup>26)</sup>という第11次教育研究集会での報告に明らかなように、集団就職対策、現実の差別に対抗する必要から標準語指導はますます不可欠なものと考えられたからである。

国民意識の強調と言語との関係の問題は、第16次教研集会・八重山支部の「英語教育における国民教育」と題する報告に、ある種ねじれた形で示されている。

英語教育と国民教育は一見して相反するようなテーマに思われるけれども、根源において太い糸で結ばれていることを看過してはいけない。…外国のことば（英語）を教える者として、それを教えながら国民教育を常日頃どのように考えながら実施しているかを3つの観点から考察してみたいと思う。

まず第一に「我々は日本人であるという意識」を植えつけることについてである。最近の英語に対する熱は異常なものがある。あちらでも、こちらでも英会話教室が開かれ、英語を教えるところは学校をはじめ巷にみちあふれている。英語がわかれば、話すことができれば、日本人であるという意識もわすれて、日本語を不必要なものに考えている人々は数えあげればきりが無い。

アメリカの支配下におかれている沖縄、外人との接触の多い沖縄で日本語を廃して英語を日常語にしようと提案するものさえ現れてきた。あいまい模糊とした日本語を忘れて、論理的でリズムカルな英語を使うことが急務であるというのだ。

これらの例から推察すれば、多くの人々が日本人であるとの意識をわすれて、長い歴史の風雪に耐えてきた日本語を忘れて軽佻浮薄な抽象的な人間になろうとしているのではないだろうか。もちろん、英語を学ぶことはすばらしく、英語を話せることは力強いことである同時に必要なものである。しかし、ここで見落としてはならないことは「日本人であるという自覚」である。

英語の教師は往々にして日本人であることの意識の認識が稀薄になりがちであり、英語をとおして外国のものばかりみつめようとするあまり、しっかりした基盤を喪失しようとしていないだろうか。それを回復し、英語の教師が自ら日本人であるという誇りと自信にみち、英語はあくまでも日本人の精神風土を改革し、日本を逞しく飛躍させる手段であることを脳裏にきざみこんで、それらのことを生徒に教育していかなければならない<sup>27)</sup>。

帝国言語（大言語）たる英語の実利的有用性は否定できないが、それを学ぶことと「日本人であるという誇りと自信」とは矛盾しないという言説。しかし、果たして、「長い歴史の風雪に耐えてきた」沖縄語を忘れることが、「軽佻浮薄な抽象的な人間」を生んでいくことはないのか。日本語（標準語）はあくまでも「[沖縄人]の精神風土を改革し、沖縄を逞しく飛躍させる手段」にすぎないのか。そして、上記のような



言説と、日本語（標準語）は「沖縄人」が「日本国民」として生きるために実利的有用性をもつが、それを学ぶことと「沖縄人」であるという誇りや自信とは矛盾しないという言説とは、いかなる関係になるのか。本稿で取り扱った時期以降、現在に至るまで、沖縄のことばと「標準語」の関係はどのように変化し、その変化と関連して、「正しい日本人」になるという命題は、沖縄の人々にとってのアイデンティティのあり方にどのような変容をもたらしていくことになるのか。これらの点について明らかにしていくことを次の課題としたい。

#### 註

- 1) 本稿で検討する時期に先立つ戦前における沖縄での「標準語」教育を扱った拙稿として、長谷川精一「沖縄における標準語励行と教師－山城宗雄の教育実践」(『教育文化』同志社大学社会学部教育文化学研究室、第18号、109頁～129頁、2009年3月)、及び、長谷川精一「『沖縄言語論争』再考」(『知の伝達メディアの歴史研究：教育史像の再構築』辻本雅史編、思文閣出版、2010年3月)がある。
- 2) 新崎盛暉編『沖縄現代史への証言(下)』、沖縄タイムス社、1982年、189頁。
- 3) 『比嘉春潮全集』第3巻、沖縄タイムス社、1971年、403頁。
- 4) 大内義徳「アメリカの対日沖縄占領政策」(『沖縄文化研究』21、法政大学沖縄文化研究所、1995年、312頁)。
- 5) 上掲、『沖縄現代史への証言(下)』、189頁。
- 6) 上掲、「アメリカの対日沖縄占領政策」、330頁。
- 7) 上掲、『沖縄現代史への証言(下)』、198頁。
- 8) 中山興真「私の戦後史」(『私の戦後史』第7集、沖縄タイムス社、1983年、281頁)。
- 9) 中山興真「英語偏重？についてどう思う」(『月刊タイムス』、1951年4月号、19頁)。
- 10) 琉球政府文教局研究調査課編『琉球史料』第3集、琉球政府文教局、1958年、7頁。
- 11) 名護市立名護小学校創立百周年記念事業期成会記念誌編集部編『名護小学校創立百周年記念誌』、1983年、507頁。
- 12) 高良勉『発言・沖縄の戦後五〇年』、ひるぎ社、1995年、114頁。
- 13) 沖縄県教育委員会『沖縄の戦後教育史』、1977年、58頁。
- 14) 守屋徳良「学校訪問 ことばの教育を通して」(『琉球文教時報』第5号、琉球政府文教局調査課、1953年、19頁)。
- 15) 高良勉『発言・沖縄の戦後五〇年』、ひるぎ社、1995年、114頁、19頁。
- 16) 猿田美穂子「標準語励行の実態と人々の意識－方言札に着目して－」(島村恭則編『沖縄フィールド・リサーチ1』、秋田大学教育文化学部、2007年、164頁)。
- 17) 上掲、『比嘉春潮全集』第3巻、339頁。
- 18) 『沖縄教育』第2号(その5)、130頁、1955年(宮古地区報告)。
- 19) 『沖縄教育 第1集』第5号、沖縄教職員会、1957年8月、12頁、22頁、40頁、28頁、27頁。
- 20) 『沖縄教育 第1集』第6号、沖縄教職員会、1958年5月、36頁。
- 21) 『沖縄教育 第12次教研集會集録』(国民教育)、沖縄教職員会、1966年、67頁、75頁、76頁、60頁。
- 22) 『沖縄教育 第11次教研・国民教育分科』、沖縄教職員会、1965年、80頁。
- 23) 『沖縄教育 第12次教研集會集録』(国民教育)、沖縄教職員会、1966年、6頁。
- 24) 『沖縄教育 第14次教研集會まとめ・国民教育』、沖縄教職員会、1968年、19頁、47頁。
- 25) 『沖縄教育 第16次教研集會集録』(国民教育)、沖縄教職員会、1970年、51頁。
- 26) 『沖縄教育 第11次教研・国民教育分科』、沖縄教職員会、1965年、44頁。
- 27) 『沖縄教育 第16次教研集會集録』(国民教育)、沖縄教職員会、1970年、70頁。